

部なくなってしまいました。火、電気、水、今までの生活の中で当たり前のものは、なに一つないということを学びました。

私は、また地震がきた時に備えておくべき物について考えました。水を買っておくか、ためておくかしたり、缶詰めやカップラーメン、かいちゅう電灯、ラジオの用意、ひなん場所を決めておく。こうした備えが防災の大切さだと思います。

私は、この地震から、当たり前のものだと思っていたのは、当たり前ではないので、ふだんの生活のありがたさに感謝しないといけないなと思いました。

地震はおそらく、私たちからいろいろなものをうばってしまいました。でも、私たちにとても大切なことを教えてくれました。これからは、東日本大震災から学んだたくさんのことを見直して、万が一の時に備えて生活ていきたいと思います。

東日本大震災を経験して

木村 美帆
北小学校6年



2年生の3月。帰りの会で日直が、「さようなら。」と言おうとしたしゅん間、次の言葉は、言えませんでした。地じんけい報の「弱いゆれがきます」の声が流れ、教室がゆれはじめました。皆は、まだ余裕があり、「弱いゆれじゃないよ。」といっていましたが、そのうち、さけび声にかわってきました。用具入れから、ほうきがとびだし、先生の机の上にも本だなの本が、落ちてきました。

今、このように言えますが、しんさい直後は、何一つとして思い出すことができずに、後から友達

や先生と話しているうちに記憶をつなげていったのです。大きなゆれに、頭の中は、まっ白になってしまい、「こわい」という思いしか残っていませんでした。

「こわい」という思いの後にわきあがってきたのは、家族の安否でした。お父さんやお母さん、家の中にいるおじいちゃんやおばあちゃんが、どうしているか、とても心配になりました。寒い校庭で待っている間、おむかえが来るかどうか、祈るような気持ちでした。でも、すぐむかえに来てくれたお父さんの顔を見て、正直、「生きててよかった。」と思いました。

ここ最近、自然の力による大きな災害が日本を、おそっていますが、人間の力では、どうしようもない自然の力の、こわさを、私は一生、忘れずに生活していくたいと思います。

自分の命は自分で守る

篠原 早智
南小学校6年



3年前の東日本大震災の時、私は家でお母さんと一緒にいました。学校から帰る時は、あのような大きな地震が起きるとは思っていませんでした。

おやつを食べていた時に、カタカタカタと地震が起きました。いつもよりも少し大きかったので、

「今日は、大きいね。」と話していたら、ガタガタガタッと、どんどん揺れが大きくなっていました。心臓のドキドキ感は止まらず、息があらくなっていました。でも、学校でひなん訓練をやっていたのでそれが役立ち、机の下にかくれて地震がやむのを待っていました。

そのうちに地震はおさまり、心臓も落ちついで

きました。その時でした。落ちつきそうになっていた心臓は、またドキドキはじめました。余震です。心臓のドキドキは、止まるひまもありませんでした。

次の日、私は南小に行きました。水をもらうためです。何かあったときのためにためておく水があり、少しでももらえてよかったです。校庭があちこち地割れしていたり、体育館のガラスが割れたりと、自分の学校の被害が大きくて心が痛くなりました。

今年、学校で防災教室がありました。先生の話が始まってすぐに津波の映像が出て、それを見ていたら、3年前の地震が起きたときの心境がよみがえりました。先生は、地震を予測することは難しいことや「自分は何とかなる。」と思っていると自然災害に巻きこまれてしまうことを教えてくれました。わたしも何とかなるとは思わず、すぐに逃げて命を守ろうと思いました。

自然災害はいつあるのか分からないので、ひなん訓練や引きわたし訓練は、大切なものなんだなと思いました。そして、自分の命を守るのは自分自身だと強く心に刻みました。

東日本大震災から学んだこと

吉川 陽菜
杉並小学校5年



平成23年3月11日午後2時46分、当時1年生だった私は、学校の教室で帰りの会をしていました。その時、大きなゆれがしばらく続き、先生の指示でみんな机の下にかくれました。いつものように地震がおさまるだろうと思ったのに、おさまらなかつたので不安でした。なき出す友達もいて、まるで戦争のドラマを見ているようでした。

ゆれがおさまるとひ難の指示がでて、校庭にうわばきのままひ難しました。外は晴れていましたが、風が冷たくとても寒かったです。校庭にひ難したあと、大きな余震があつて「学校や家がくずれちゃう！！」と思つたり、「きっと夢だ。こんなことあるわけない！！」と思つたりしました。しかし学校の上空をヘリコプターが何機も飛んでいくのを見て、「本当の出来事なんだ……。」と実感がわき、さらに恐ろしくなってしまったことを今でも覚えています。

家に帰ると食器棚がたおれていたり、本がたくさん床に落ちていたりして地震の大きさを改めて感じました。家族全員で、手をつないでねむりました。2日後くらいに、電気が通り、テレビを見た時に大きなショックをさらに受けました。小さな子をはじめたくさん的人が津波などで亡くなったということが分かったからです。まるで悪夢を見ているかのようでした。家では、みんなで協力して元の生活にもどそうとしていました。水も使えない日々が続きましたが、昼間、仕事でいないから給水所に行けないだろうと貴重な水を運んでくれた友達の家族がいました。その水は貴重すぎて飲めません。今でも家に宝としてかざっています。

この震災を通して、家族・友達の大切さやたくさんのこと学びました。4年前の震災で学んだことを忘れないで、普通に過ごせることに感謝していきたいと思います。

東日本大震災

高桑 莉玖
園部小学校6年



あれは3月11日、午後2時46分の出来事でした。私は学校にいて、算数の学習をしていました。急

に、校内放送で、「ウーー」という大きなサイレンが聞こえた後、

「地震です。地震です。速やかに机の下に隠れて身を守ってください。」

というような放送が聞こえてきたかと思ったら、急に強いゆれが伝わってきました。私はすぐに机の下に隠れ、身を守りました。そのゆれはとても強く、私は、学校が倒れてしまうのではないかと心配でした。他の教室からは、悲鳴が聞こえてきました。そのゆれは、とても長く続きました。ゆれがおさまって、外に避難すると、生きていることにホッとしました。外にいる間、余震が何度もきました。一度荷物を取りに教室へもどったけど、ランドセルに教科書を入れている間にも、また地震がくるのではないかと心配でした。

その後、祖父母が迎えに来てくれて家に帰りました。家の中は、引き出しが開いていたり、物が散らばっていたりと、メチャクチャになっていました。家の外には、屋根から落ちたかわらが割れていきました。

その日の夜は、「寝ている間に地震がきて、家がつぶれて死んでしまったらどうしよう」と、気になつて、しばらく眠れませんでした。

次の日、発電機で電気をおこしてテレビをつけてみると、「東日本大震災」という大きな地震だったことを知りました。

それから三ヶ月後、やっと家にかわら屋さんが来て、屋根がなおりました。その時、あのような大地震は、もう起こらないでほしいと思いました。でも、それは自然災害なので防ぐことのできないものなのです。

この地震をきっかけに、いつ大地震が起こっても大丈夫なように、真剣に訓練に取り組みたいと思いました。

大地震を経験して

奥村 あかり
東成井小学校5年



私が小学1年生のとき、東日本大震災がありました。

ちょうど帰りの会のときで、すぐにつくえの下にもぐりました。とてもゆれたのをおぼえています。ゆれがおさまってから、ランドセルも持たずには校庭にひなんし、家の人のむかえを待ちました。

家に帰ると、食器だながたおれて、たくさんのお皿が割れていきました。あらためて、大きな地震だったんだと思いました。

1週間の休校になり、学校に行けなくて不安になることもあります。でも、また学校が始まれば、友達と楽しく遊んだり勉強したりできると思って過ごしました。友達にまた会えたときは、本当にうれしかったです。

いろいろと大変なことがあったけれど、みんなに支えられて今があると思います。今、元気でいられることを幸せに思います。

忘れられない3月11日

吉岡 聖
瓦会小学校6年



ぼくは地震が起きた3月11日の午後2時46分、学校で帰りの会をしていました。

地震が起きたとき、水そうの水が大きくゆれ、こ

ぼれそうでした。ぼくはすばやく机にもぐって、地震がおさまると、すばやく校庭に出ました。そしてお母さんの車に乗って家に帰ると、家の中がゴチャゴチャっていました。その夜、家の中はゴチャゴチャだったのでおばあちゃんとおじいちゃんの家で過ごしました。

次の日の朝は、電気がついていませんでした。地震が起きてから数日後、電気がついた日はとてもうれしかったです。テレビの放送内容は、ぼくの好きな番組ではなく、ニュースばかりやっていて、CMもACしかなくて面白くなかったです。

それから3、4日間くらいは余震が続きました。

地震があつてから数日たつと、ぼくの家のガソリンスタンドはとても混むようになりました。行列の中には、先生や友達のお母さんやお父さんもいました。とてもたくさん的人がガソリンを入れに來たので、お父さんやおじいちゃん、おばあちゃんはとても忙しくなりました。とっても大変そうでした。ぼくは、いつかガソリンがなくなってしまったらどうなるのだろうかと心配でしたし、お客様の苦労する姿が心に残りました。

あの日から3年以上過ぎ、今はもう東日本大震災の時とはちがって地震も少なく、生活は不自由なく安定しています。でも、あの3月11日に大地震があつたことを忘れずに、いつ地震が起こってもいいように準備しておきたいと思っています。そして、たくさんの人の命をうばったあの時のような大地震が起きないことをいのっています。

東日本大震災を経験し

馬込 海斗
林小学校6年



2011年3月11日、僕は東日本大震災を経験しま

した。震災当時、ぼくは2年生で、帰りの会をしているときに、いきなり大きなゆれにおそれ、ぼくもクラスのみんなも、あわてて机の下にもぐりました。友達と、「地震、けっこう大きいね。」

最初は近くの友達も机の下から話しかけてきましたが、ゆれがずっと止まなくて、話すこともできず、机の脚をつかんで、ゆれがおさまるのをまちました。

ゆれが少しおさまり、お母さんの迎えで何とか家まで帰ることができました。家を見ると壊れている様子もなく、家族も無事だったので少し安心しました。しかし、スイッチを押しても家の電気がつかなかつたり、蛇口をひねっても水が出てこなかつたり、普段通りに生活ができないことに、また不安になりました。電気、水道は使えないけれど、ガスは使うことができたので、おばあちゃんとおじいちゃんが雑炊をつくってくれて、みんなで食べました。また、電気がつかない代わりに、ろうそくに火をともして夜は過ごしました。

次の日、運動公園や市役所に水をもらいに行き、食料を買いにも行きました。これからどれくらいの間、このような生活が続くのかと思うと不安になりました。でも、水も電気もその次の日には使えるようになったので、ほっとしました。

震災を経験して、これまで当たり前だったものが使えなくなり、ぼくも家族もみんなもとても困りました。今も、避難生活で普通の生活を取り戻せない人達もいます。震災を通して、いつも当たり前だと思っていた普通の生活が、実はとても幸せなことなどと分かりました。この気持ちを、震災から何年たっても忘れない生活していくことが大切だと思います。

3月11日の出来事

鈴木 若菜
小桜小学校6年



私は、3月11日には、まだ2年生の終わりのころでした。その日は、まだ学校にいて授業の時で、急にゆれ始めたのでびっくりしました。経験したことが無いくらいのゆれ、水そうの水がこぼれそうだったのが、今でも覚えています。校庭に出ても、近くにいた子がすごく心配していたりと、心にすごく残っています。

家に帰ると、水は出ず、真っ暗な夜を過ごしました。ただ近くの山の中の所から貴重な水をくみ、何日かは、それで過ごしました。お母さんからは、このしん災のせいで、つ波が起きてたくさん的人が悲しんだり、苦しんだりしていると聞き、ここは恵まれていると私は、ありがとうございました。

それから毎日、学校に行けなくなりました。友達と話せない、授業も受けられない、毎日ただひました。そのまま終業式を向かえ、2年生が終わりました。今でも、地しんにはびんかんになったと思います。でも、つ波が来てしまった所にくらべれば、少しのことだと思います。でも、もう二度とこのような地しんは、来ないでほしいです。そして、しん災にあってしまった所の復こうを願い、3月11日前の東日本の自然や街や物を取りもどして、また笑顔をたくさんふやしてほしいと思っています。

忘れられない時間

塙田 葉菜
恋瀬小学校6年



3月11日、私はいつも通りランドセルの準備をし下校しようと校庭に出ました。そして、先生が話をしていると、2時46分あの魔の時間が訪れました。何の前触れも無く起こった突き落とすような揺れ、私は驚きしか感じませんでした。

ですが時間が経つにつれて校庭から見渡せるいくつもの家の屋根の瓦がなだれのように落ちていくのを目りました。

何が起きているのか分からず、自分の安全も危うい初めて感じる「恐怖」の時間。

家に帰るまでも恐怖心は消えませんでした。そして目にしたのは自分の家の瓦が何百枚と落ちている光景、隣りの家の人々が腕から血を流している光景でした。

とても怖くて、まるで夢を見ているかのようでした。

家族からは、当然連絡は無く無事なのか分りません。私の地域は近くに海が無いため、津波は来なかつたけれど、家が海の近くで、巻き込まれてしまつた方、いろんな方がいます。その方と比べたら、私の体験は大きな恐怖の差があります。しかし人が亡くなるという痛みは、少しは分かります。自分の家族が亡くなつても、その場をはなれなければならぬ……。そんな痛みは何よりも痛いです。

私だったら、立ち直れない。だからこそ、今の人達はすごいなと思います。自分の芯を強く持ち、たえる姿は、とっても尊敬します。

私の地域では津波は無くとも土砂くずれやいろんな災害がありました。

だから、たくさんの災害から守りぬいた、自分の命を大切にしようと思います。

そして亡くなられた方の分まで生きます。

東日本大震災を経験して

渡邊 歩未
葦穂小学校6年



私は2年生のときに東日本大震災を経験しました。

あの時、私は複式学級で3年生と6時間目の道徳の授業を終え、帰りの用意をしていました。突然の激しいゆれが私達をおそいました。思わずその場にしゃがみ込んだのを覚えています。ロッカーの近くだったので「倒れて来ては危ない」と思い、急いで机の下にもぐり込みました。ゆれが収まり、担任の武川先生の指示で校庭へひ難しました。幸いにもランドセルを取りに行ったロッカーは倒れでは来ませんでしたが、それでも当時の私は恐怖と不安で胸がいっぱいでした。

校庭の鉄棒の近くに固まってひ難し、親のむかえを待ちました。泣き出す子もいましたが、上級生が「大丈夫」と声をかけてくれ、安心しました。

祖父がむかえに来てくれました。家に帰ると、余震で家具が倒れでは危険なので、ずっと車の中で過ごしました。家の中には入れず、暗くなつてくるので心細くなりました。またゆれるかもしれないという不安がずっとありました。

家の中に入ると、電気も水道も止まつていました。ペットボトルの飲料を飲み、レトルト食品を食べた日が2日ほど続きました。電気がある事があたりまえだったけれど、電気のない不便さと電気のあるありがたさをこの時初めて感じました。

日曜日の夜、電気が復旧してテレビを点けたところ、津波の悲惨な映像が目に飛び込んで来ました。不幸にも津波に巻き込まれてしまった人々の

ことを考えると、その恐怖や無念さを思わずにはいられませんでした。

もし、このような大地震が起こるとなったら、今回の経験を教訓として、地震の時の行動やそれに備えることを考えていいたいと思います。

震災で気づいた大切なこと

塙田 理紗子
吉生小学校6年



東日本大震災、私は当時2年生でした。吉生の森の大きな杉の木もゆれて花粉が飛び散る中、校庭に全校児童がひ難しました。私達は恐怖に包まれ身動きがとれませんでした。

私は家族のことを第一に考えました。いつも学校の下までむかえに来てくれるばあちゃん。工事などの仕事に力を入れ、がんばっているじいちゃん。ガソリンスタンドでお客さんに笑顔で対応しているお父さん。おじいちゃんおばあちゃんの介護の仕事をしているお母さん。いつも私のめんどうを見てくれる兄2人。家族を思うだけで涙がとまりませんでした。私はいつも、じいちゃんにためたくあたっていたけど、じいちゃんのことがとても心配で、一秒でも早く姿を見たかったです。

家に向かう途中で、光がつかない信号やへいがくずれたり、かわらが落ちたりしている家がたくさんあって、自分の家も心配でした。家に着くと、やはりへいがくずれていて、家の中は物がなだれ状態になっていておどろきました。でも、いつものように、じいちゃんがサンダルで元気そうに出てくれたときは、本当にうれしかったです。

その後は、家の中から食べ物や飲み物を持ってきて、車の中で過ごしたり、お父さんが仕事で使っている事務所の部屋にねとまりして過ごしました。